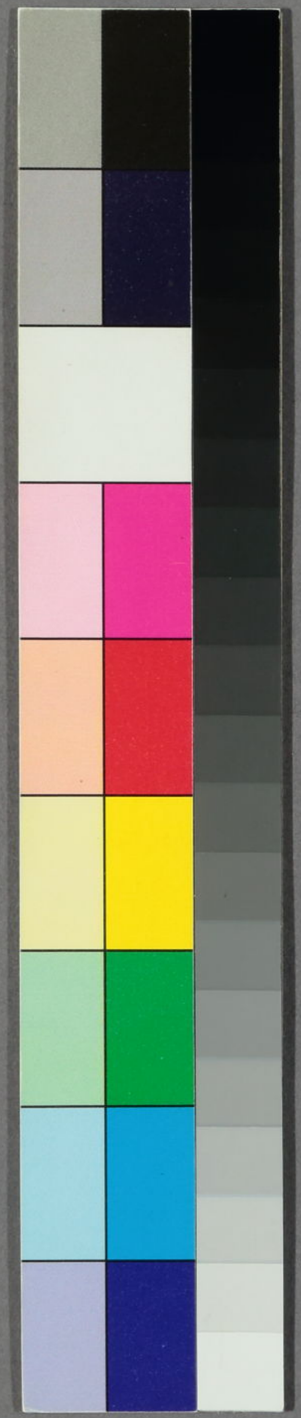


今津屋

胡蝶物語

胡蝶物語 自叙

懐牛遇ふる物ゆゑ人のてもく所をうらむ夫夢の
覚ぬ夢となり爰亦覚
覚なき人間を閉こめ
志ゐんざるの気をえぶ
荘子の夢よ胡蝶とのまぞ
胡蝶也とうの意を得て荘子

さくらど俄然として覚るそれ蘧々然たる
荘子も荘子が夢よ胡蝶となる歟胡蝶の夢か
荘子となる歟覚て後なれば物の変化殫
なき浮世を恰大夢か似たり善悪の荘子と胡
蝶の如く善の善たる我が我たる悪の悪たる豪
も覚て後なれば疑ふの聾盲の夢か歟をそん
ど聾者の夢にあらんを知んや夢と者をなんぞ
小あらを悪をなんぞ我と物とをわかたんや眼のまざえざる
ところのいまざるる和孰かよくこれをやめみん性の
善たる化して悪となり性の悪たる化して善となる皆
是心の起こる所新の形よ移り変る後の悪異なるど夢なれや爰
もそれや覚てそのもくところを知らざる。

文化六年己巳六月

曲亭主人識

少年圀

赤圀鴻

猛虎

出

少年圀をそのの遠遊らぐ里ゝ
爲学おうそ四ゝり水ゐ渉ゐ
とりひさいらぐけゐてといひ孝行ゐとふ

この圀よ赤蛮鴻とらのるありりらうぐさめぐく
めらぶいわらゐ二ぢらのそみをらく泣虫ゐ又んの虫からいかる
まついたる三ぢらのそみをらく泣虫ゐ又んの虫からいかる

あらゝく圀よりの木枯わり又らびらゐ行とのふ竹ありこの竹
二十丈のあうだよりこればられるくまもゐとものまを
をそんちりいゐ蛇ばいその比らちまでまるくが如ゝものばる虫がそ

裙張蛇

大漂木

悪女の深南魚

強

跡　蟇

飲

青つ桐律

四

具い伊仟の蚤

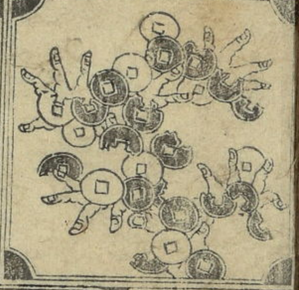
ごういん凪いた頃なれバて食よび臭るのいおうたゞ
ひとりとの
青れもめをそろみさろだるのまつ一ぱいを

ごうくらん

めをろ桐りその茶ほく茶ろんのごく本のんなうと
らうよ飲くうぐいのことふのさうちょうとうてだされ
ふらんでめくらの飲めのちょ本文はうえんたろ

貪

阿太　次計　梨



焚

慾ふ促ぐ織と

四

止ん脫ぐ鵙

一名仇長嶋

ぜんらん凪いさぼうでおくそをらごとのつめあぐさ
こまものご待のごくけめの生くちをさりんおこけすと
ふものの本めりその茶一文ぜにみるまぐめをそぐせ一如一

又らくだうさ
あさまごぐうア
ぐうとうら

夢想兵衛胡蝶物語巻之一

東都

曲亭馬琴戯編

發端

人生五十年。七十八古来稀なり。殭ある生を天地と禀て。限ある愁を火宅と恥ら〳〵。九六の百と繋ると。一文銭よ生爪を剥し。二品五篦と火面を張て。利を射る音。熱閙場の土ちうり富く。節前の大どうめひかうく〳〵。説つ泣つ。備なるとの地蔵尊も。玉を抱けばかるゝど。罪あり。況や返とうの閻魔の口へ抹香嘗ても腹の足ぐうらゞ。地獄の制度も金次第とい。ちうばる金言なるかな。さるぶりの。他の物と名のにぐ〳〵ど。金銭ぐうこそ。逗留ちび。一夜泊の旅人のごく〳〵。舟のれんが出入あり。陶朱が財もをを。ぬるく。石崇が富も一期い有がじ。されば飲食い命を繋ぐ輪あてい。肚餓ちうる

よろづ物いや。東海の鯔條。西山の鳳脯とや。毛唐人の食ぐわいを小判で買たお初鰹くちも。腹ハ街道茶漬くちも。喉三才を通るうちぞかし。こゝて後よ茵松よ積ミとて。大夫とつぐ名の艶書殻同拵。それがそれぐみの直うちもの。さをろくへバ室庫ハ膝を容るゝ所のみく。始皇の阿房も。原憲が蝸廬も。宮も藁屋も。都も鄙も。廣いと狹いとハ。ものゝ数ならず。踡伸して寝る処が。席薦一疊の外へハ出されぬぞかし。さて亦衣裳ハ五尺の體を纏ふ。假の身の皮蜀江の錦も。敝ゝる細袍も美しいとて。それが美服雑〻人より。ぐろを。元ごちやへ赤裸宗向院の土とならんぞ。ハゝ。横鼻禅ハ號鼻禅。ほろ三味ほろ摩羅。えて差心のものゝ。紗綾縮緬でも。横鼻禅ハ號鼻禅。ほろ三味ほろ摩羅。まこでも。麻上下ハ麻上下。この道理を二合点されバ。肩と膝とハ色紙あてゝる帷子着ても。三伏の暑ハ見よ。肌脱ぬへもあり。二両で二分ぐ。二重紙子の帯

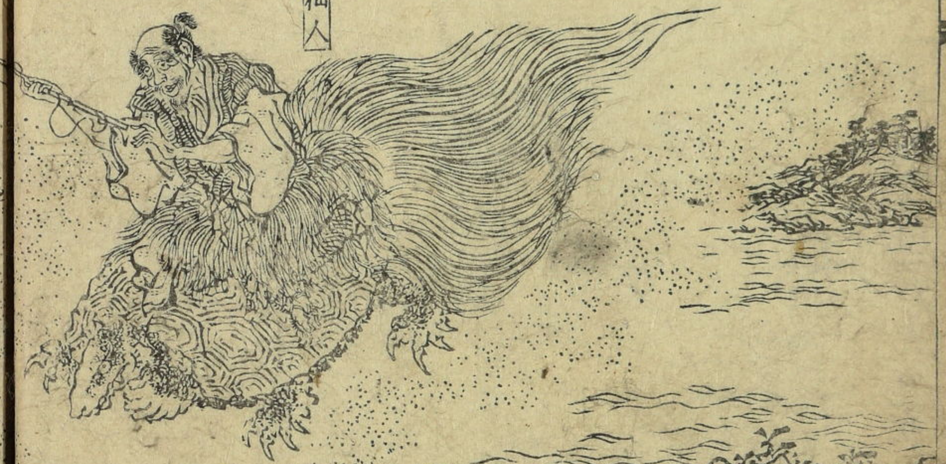
ちめても。白日青天よ。ま拭被つゝ女もあり。分だ〻ることいふまい衣服の美悪よりハ。あくまで。商人のまた衣着ようしやとハ。古今の序者のうまいくちや。風雅でもなく。洒落でもなく。あまつさへ驕をとがめて。高ハりのとんちりうぐ。宛ハなくちやんと一ツまへ。三ツぶつ襲後で被て出袖流行模様の人でよめたちやんと。ホゝゝや褄前ハ質屋の庫へ。向ふ傷をこゝろ。礼儀を整る彩色ハれバ。蔽れようとも褄を引ゝけ。猶たゝとゝもお太刀をさゝ。痩身代でも借倒さぐ。天うとり青表紙の端を開た。昔の人の風流をえらく。今ごろ態とゝの尊さんも。金ゝ〻苦をとるまいすべく。天道必盈る戒缺く。金があれバやづる子がこゝ。子が多ければ。幾がみ。美人ハ馬鹿あり。魔即ち才子あり。氣の利ハ。ほゝ気多

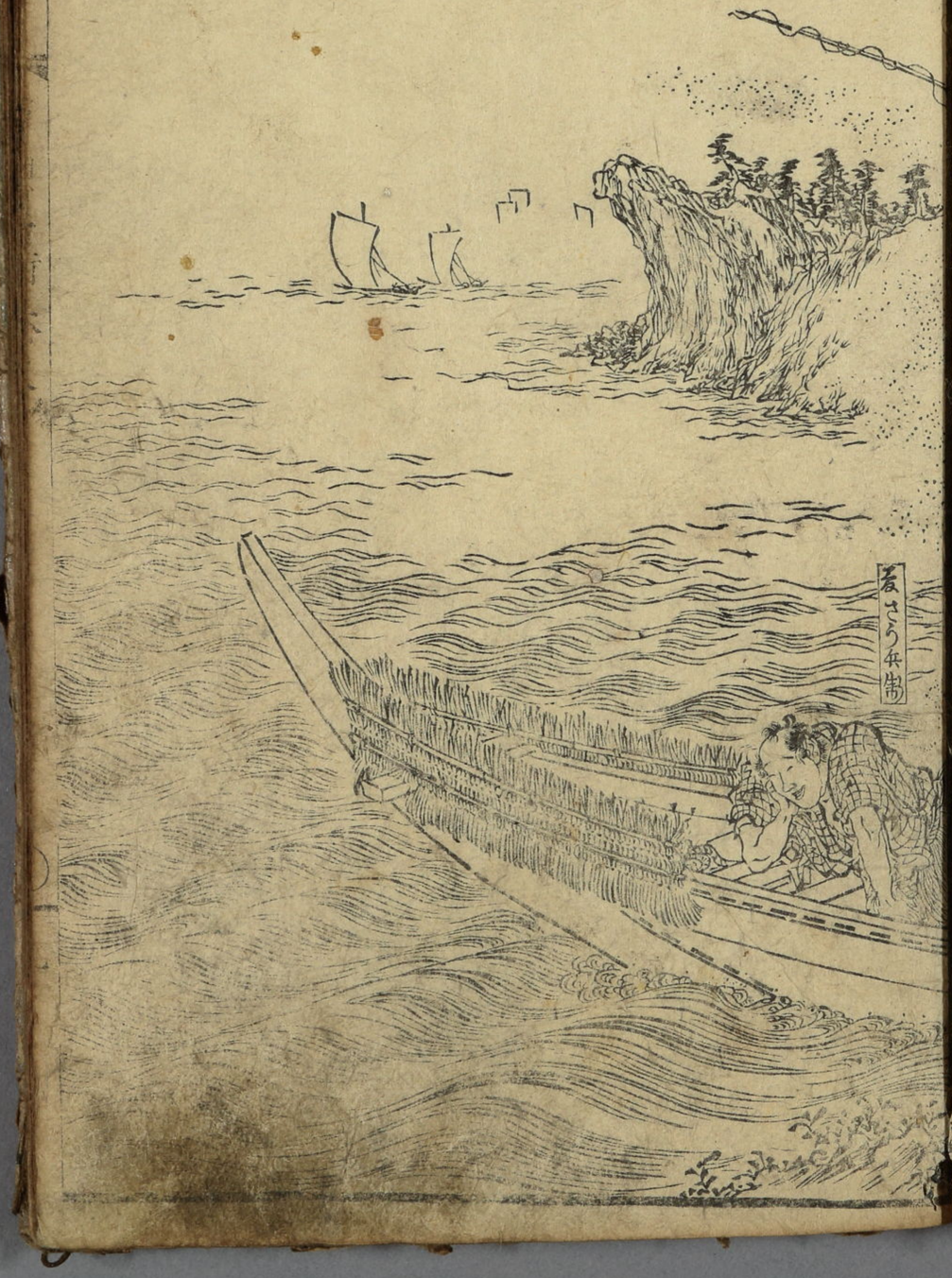
くも口なれど意地が強し。堪忍五両と定めこゝろ。ふ妻木綿が一反でも二
買もとこの桐塲まで。密夫の扱金ぢう。武両二分下直ぢうちに売
ぬもろ物おやと。ひとりもの吸物椀。十人前より足ぢ紙とも。昔堅地の四十
年。笠のぢうぢう世残捨て。一生涯を夢と暮せ。夢想兵衛といふもの
あるぢう。渠ぢうめしそのむり。年も十六むさの岡。四十七字の假名川ぢう。
浦嶋塚のほとりは住ひて。こゝ野の春秋をむく風ふも櫓をおて。釣と
網とる世を渡世。菊を東籬の下ぢう採らねど。五斗米よ腰蓑を折
めど。上そこ。なぬるの夏うたと雨ぬぐぬ日も笠を放さで。ゐをまき海
原の廣たよ比べ。常よ一葉を浮べてそ。一瓢の酒をたのそ。和よ眠そ舩
よりそ。その外を求ざりし。一日遊谷子が著したる。和荘去衛との冊子
とりそよぢう。老佛道を踏ぢけく。能書究そ精細

ろれども。馬鹿よ附る薬ぢう。荘子がぢう上手。達磨がそ
分別。おぢうぢうぢう銚子とそ
の席薦へ。ころぐ酒をぢそ
の九夫心。席薦が伏もねが會席ハ繁昌せど。頭が冗
ねべ。松魚も下司の次の入ぢど。人間萬事塞翁が。馬ぢ
糞で菊とつろく。鑓虫が飲みもあぢ
狗をこのまぢそ。暴風よあんべぢど。和荘兵衛も
嶋めぐりもをべぢど。嶋めぐりせぢど。貧福窮達の理を悟べぢど。何をかいつそ和荘
兵衛といふ名。画ぢろ綿と盛と扱を足て。脾腹い腹よ満
ど。憂もつらんも食のみて。葉ぢも龍をこのまぢど。真の龍

おそろしいる処まうがく。業平も色を好だへ。真ある女の志をまうがくまん。正真の物を生ずまくまそ。後学まれ。よや十万貫の。踏費弥腰よ着ごとも。彼揚州の鶴ふ乗まく。大千世界を徜徉し。人のまごえぬ處をえべ。自を誠のまくまもまくべし。暴風があけり。吹まうまとまへ。又ややまくよ。頃日の日和のよさ。風の神も風の神。龍神どのもうらめんと。おくまもまのの願ひを渡しまふも本牧の沖よ舩をまうめ。まとり暴風をまき日ぞよ。弗と気づびをぶしまく。楫と枕よこんだも。そうまくと目睡むまうまう。向髪まる老翁。腰養と著。約竿と肩み。太公望みへ髯がうまく。実三郎みへちと違まるが。忽後とまく舳へまき前よ主在。まと起まくまく。と医者どうまうまうま

浦嶋仙人





若さう兵衛

嗚呼いとうねぞやく。翁もも〳〵亀よ多くく。蓬萊宮くに棲たのの
嬉しさもあり給さ。三百年のよわひも竭まば一千日の悲しさよう経しそうの
のやうな生物もろ〳〵生さとうの生をねりのも。れのが猿智恵よ倒され
唐山みくろいふ友のものがある。昔をぞうじやのかうじやのとえぬ世のことえん
やうふ。えぬ物ハ牝えさざる。和僕の書をくて聾家を威し。さてこぞうが一3
生の疵よろ〳〵く。浅まうけるをべハさ廣い浮世の五尺の軀を
うねく。大千世界をえん極めるんとえ。石亀のおごんど鷹が飛べハ糞蠅も飛
よごほやうみのの。縦天地を極めようとも。自の為化のあるのごとく。尼
子ハ父母の国を去ようとも。歌人も居なごく名所をある。手長足長小人嶌
胸よ穴のある国でも。慾よかわいさうなる。人のえぬものがえんといえ。奇を
好む悞とまうも道よ尿あり。泥中よ玉あり。呉世の人がるとえんるれ

どもその気のつぬ所をえる処。真の活眼といふぞ。それがさく。是をえんと
容易くべ。その境よ至んと。左も難し。鶴よ乗せその古めりのうに。此物羊を
とらんべ。こと紙骨とて紙お鴟を造る。この糸を著て糸のをえを撓よ
繋ぎ。その紙鳶よ乗るとえる。風おのづく紙鳶を飛して空中よ冲らんと。
列子ふも書るとべ。紙鳶ハ昔小股潜よ。漢の大将韓信が。敵乃
陣中をえんがよ。造りしといふ。右る事歴と今さうるべく誌えんさ
その紙鳶よ乗んよ。東風ふくとえハ。少年国を直下し。南風ふハ色慾国
を直下し。西風ふハ。強欲国を直下し。北風ふハ貪婪国を直下をし。地を行
う遥るとも眼ハ明よ。遠眼鏡をうけるようくえ。耳ハ聰しそ。
酒を飲ざるようくえ。両よ潤よぞ。日ふ曝らされど。食ざれども餓を晴と
ども痩よぞ。是とその紙鳶の奇特と。彼四の国の周よ四つの洲あく気候

郷とも。煩悩郷といひ。食言郷といひ。飲楽郷ともいへり。風は醒て。到らんと自在に。努々疑ふべからざれと。いふとなく。が形も滅て。約竿のこゝぞ遺りける

少年國

夢想兵衛が浦島が授る釣竿をとりそうろう。こまを削りて骨とす。大さるの紙老鴟を張ってくちと細目ど教よ住て釣のまねつりけるがその具合をもいろいろぞ。章魚といふ。鳥賊といふ。海鼠もあり。牛と蛟子かゝひろう。鼻を通ことといふ。蔵より出ぞ。仙人よりくまなく。こまを假名川の墓よりも出一条の糸をもって。忽地雲よ繋がきそくる。汽よりも。忽地雲よ繋がきそくる。未を杖よ結とめぞ。その紙鳶の背よまぎそうれ。風のりてめくを約束と。東風そよくと吹ふふ。不思議やその紙鳶。夢想兵衛と繋がく。空中よ囚き升り。雲を霞とのそ。富士山の頂上とさ。むなまでよるりそう。夢想兵衛。そでめこそ。落まいとそよく。一ゐ不孰よまぎ蓄ても居くま。その紙鳶ちゑと佳く動ねが危きよ刻至て。おそろしいとも哀ぞ。板三寸下ハ地獄とやけどえがあっても。それ限じやとまうるがふ。海私雲つて世をするのもあり。梢五六丈上ふふ落とび命よ陥むやうまあじ。物ハなのふち汐貧乏も倉ふ傑とび。借銭乞が苦よるふね道理ぎや。と早合点く。そふく淵哥うひるがふ。下界迄。直ちせがこそ名よおゝ年国郡ハ何とよやうまねど。水子絵とかゝ。くてこの処の人物そ。悉く稚児ゆ好景絵よ画さ。小人為よ異るぐ。赤彼塞の河原よ似ふされがそこ活るの。ぞともく化生おて。

天地陰陽の氣を受て生れ出る。身の丈僅に二尺ばかりにて。男女の髪をそろえて。坊の窪へ一括にゆひ。額門ひくくと動き。天窓の柔らかなるもの。手も利ず足もたゝず。ねかせ立ても坐りもせぬ。男子は桃を垢と浅黄女子は桃色を垢よ白を垢。いづれも鶴亀松竹の大きる紋を金銀泥にて描ける。着せ帯を結ぶ。頭巾を冠らせ。副紙の外へ帯を結ぶ。頸巻をかけ。味醂酒の樣の漏るゆゑの。ほうれい綿を戴きて。足袋をはかせ。摸樣ある。猩猩ゝあり。三度の食もの。乳汁のみでゆゑ。大小便をも居るがまゝにて。衣裳の濡穢を厭ひなば。浴よいるゝ。成長嫌らひて。月額を剃ら。人の物。ゑぼ物の差別なく。ゑる物毎こゝろのまゝにねがはぎるゝ。階をも踏でむづかり。食よりて。口へ入れて。歯のはえるを舐ねぶりもあり。大きくなりて火の燒を恐れ。刃の鋭きを知ぬ。推量しても同とうがてん。赤小豆を入る。蜴ゝ毋衣嚊を調宝ぐり。寐入れば泣。肚餓れば泣。暗ければ泣。きらぬ人を見ては泣。外へ抱て出ればやむ。乳首さへふくませれば。忽地泣やむ妙あり。そのうるさゝやうさ。殺ていんやうもるけ也ど。天道ゝ人を救さぞ。この水子村ゝ恩愛といふ二柱の神をうまして。男神を養育と稱へ。女神を奴婢の令と稱へ。お乳毋。奴婢。伽扈従。抱守。里親。小児医者の神まで至るまで。神あつめ集めまひて。もらうべき由緒の家へ。お乳毋奴婢。伽扈従の神を遣し。中人の処へ。抱守里親の神をつかはし。るゝくの処へ。ぶん分身して影向あり。神養ひよ艱ひ。神育よ育よ。その慈愛の深き

王。硯の海を掬るとも。筆ゐい書も尽さゞべく。日よ曝を小蒲團そ。
風生き湯気立く。腐生てる海蘊のでくるれども。これを臭〳〵とまのへ
ぞ。雨よ恨むまの〳〵盥ハ水のるてる鶏卵のふるくよ異るねども。これを
稼〳〵とまのへぞ。懐の中。膝のうくよ尿をされても。腹をそちるへぞ。可笑も
るいうよ。げく笑ひ。寐るとそよねんころと唄ひそ。手を枕て胸を敲た足
を揚て。腮を啣う。髪をむまつう。乳房よ歯秩をつるまて。腫痛む
とあとども。その乳れを咎めゐへぞ。虎子を枕とて夜をあし。鼾ある
さて日をとし。やうやくよ寐せはけて。まま嬉〳〵やとやよ間もるく。かーの
音よ駭さく。火のはくやうよ婦当され。結びくけ髪を握り。食くけ
よ。茶漬の香の物を吐出〳〵。周公旦が士よぐうまふとそより。りそうと遠〳〵く。
〳〵迎へく抱き起〳〵。まくけるまるへるもせぞよ。ひざるれ腹も徭そぞ。

安閑とおのづからよ。寐ころんでゐるおまろさよ〳〵や国の三つある年。
十三月めぐ生まて人でも。斯気を長くりるく物うさて暇あるとくへ。
ま打くとうてうまとうさせ。そのめくというてう堂をつくせ。天窗てゐ〳〵。
けぐり〳〵さゐぐの藝をまろけ。こまぐでざれへ醴と麋羔を定め。轉ぶを剛ほ
いと誉め。位をよん子と誉め。そとうくが魚貝を食せ。些の物を舐つそも。
てんと肯と叱を拗させめ〳〵ゐんまといひ義をあつけといひ。おへせのものをさのと
いひ。大便をうんとといひ小便をまとといひ。神仏をのんろうとといひ。花見へるの物を
ゐうねとといひ。怨ぐさりの紙いやく。又おろうとといひ。お灸をおんよとといひ。立こころち
とといひ。寐うをねんゐとのひ。稚児をも又ねん祇といひ。稼き物をだぐといひ。ものさ
おぐちとといひ。犬をうゝとうへ。描をゐあ〳〵とのひ。嵐をちうく〳〵といひ。魚ゐる
をそとといひ。茶をちやく〳〵とのひ。酒をあろうともいひ。ほ紙てといひ。足

をあんよとりひ。衣裳をぞといひ。草履をぢよといひ。男子を坊
とのみ。外國と言結のちがふるをもてくよるこゝろ。そらく腮を嘗てげさ笑せ。
坊ハ雖ぶ子ぞと同よ王もあり。抔ぶよ麝美をそうそるるの。この外
あんの。大約の郷の時疫。疱瘡と麻疹と。百日咳。この條。五痘。
驚風。胎毒ホあり。いづれも似よる症るれど。茶剤を嫌つく。零なりも
飲ど。熱のあるよびよ脅恵づんく。朝くく晩そ抱まくわよぐり。いづ盆
中ら正月中ら。飯よ食よの外よ慾もるく。三年みく懐をそるれ。五年
みくそうく走り。七年みく寒暑をお。當家より七家そを一期と
まそ。いづまもひとうあれがるのよねが。恩愛二柱の神のすよせのよようび
まそ。一日も佶がさけまど。かるれあハ。天道別して油斷るく。かくのごく必
絶の手當あり。水毋といふよりのあハ。眼がるのけまど。小鰕が黏てめくの物をえ
れが。水毋もろくそやうよおがえ。瓊琦と
黏てめく物を食へば。瓊琦もろさやう
ある紀。予筆を算を亭主あハ。算筆のある女房あらの目盲よ杖。坐行よ
車ごろく世の中ハ朕相りち。天道をを缺るを補ひ。又盈るを缺が商賣と。
恩ハ公道の及ぶ糸みく。又の報。愛を人情の赴く所みそ。母の報ハ
恩を稟て恩をそうざるりのハ。禽獣よ等しく。愛よ劣ぢく。こゝを誤言るも。
又禽獣よ更ぬうぢと夢想兵衛ハ忽地曉て。せるの紀親が慕しく。
存命てごるとき紀よ。孝行らしくもせるんぢ。冥加るんやう悔しのやう。面目
るのこぢ紙拭ふ隙よ。紙鳶の糸をるくと伸て。郷嶋へとのそそるぞよ。こゝも
ちそりあ年國のうちるれど。善と悪との潮堺。天矢桙の骨隙難不敢
御ろう。石の榜余よそそまそう。さそのれよ生るりの為俸をんるよ。七八

ろくろくび
金五郎ばけ地
いちのこうのうらた

ごふくりのうらみ
きりぬけのはし
ふるうの天神

家より十五六家を一期とて。衣服を肩と腰を逢ひあげの字袋よ張子札を著るもあり。頭髪を小判形よ。頂顱のまん中を剃て四方髪をまく四そろ結の蜻蛉髷もあり。茨子坊主もあれど月代を剃髪をもを嬶よ放髪くへざんだら髪ふそ。天窗のへ白雲そる引眞よ氷柱のるもあり。弱虫へ強虫よ征せられて。これを餓鬼大将と仰ぐ。樹よ攀るを猿猴のごく。水を越ぐるを河童のごく。草よ隠るゝを鬼のごく恰るを鳥よ似そう。衣裳よ縫裂を厭ど。肢體よ生痍を厭ど。犬をけうけて。棒をとゞ〳〵嵐を愛して。玲を鳴さう。春へ紙鳶よ飯はを忘まそく。鄰の梅花をちら〳〵夏へ蝉と捕そ。蝙蝠とそれおうて。学益の貌生を楽しく。秋そ野よ蜻蛉を逐ひ冬へ背門よ氷を砕き雪を紙團め蛍を集れども。これを燈みそ。書を讀ときるのまど呉牙の勢とそる亦朝の立つよう。

昼の八つまど机よもたひ筆をそれどもう。一畫一点よくも習へど。人形の首もうれ飽まで。草紙へ水をうけく。勘定をあのし。生もせぬ小便よまごく立て。傍輩の草履をかく〳〵もるの厠へそく。掃溜の桃の樹よ尻を向けるぶごく。手を塗面を塗る工。草紙より黒く。煤も袖でうこ。土間を既足でめる人の前へ出せば。指を銜え。逡巡して。袋を被つる猫のごく。弱虫を罵るとれ。膝とそゝめて。屑吻剥刀のごく。戎い好そてぬるゝ〳〵跳をそゝそ。雪踏のほろ〳〵を厭ど戒も障子を破る。行燈よ穴をあけ。壁をそそて土を食ひ持仏を捜して。線香を食ふりのおうその罪放ぐだけ。近尊者。己むを紙幻ど。机よのぜせ茶碗よ水を入まそくりそるもあり。恥をもうど。灸をそそうろくとれ四郷を動して。男のあるを名へ生そ

此地の國法、罪あらく答うつとぞ。脱去ぬべく責むと。或ハ髪を
つめり。或ハ背を打よ。瘢のつゐぬやうよそ
ゐんとぞ。入戸棚へ入まそくと。刑罰の第一とそ。お
足せく懲ものとみる。天矢柾の
よ。両親尊者、慈悶恩愛の仏法るれが至てふぬるさ仏囲ふうとをりて
下賤の男女。その法を怕るとぞ。ろづものが恋よる友よ。両親尊者へほ
苦労をうけ。冥罰務よ脱まぐくて。その中
よ。鼻の下の長さものあり。ものもあり。鼻の下
の長さ生涯ぶとうる。爪の長さ必ず貧り。手の長ふへうのごと盗むおれ
ども。両親尊者これをまぐるとぞ。ありて人よ對して彼
を荅む。人あて彼を荅るとぞいふ。目を細く。鼻をひろせ欲びうること大

くうるとぞ。賞罰正一うざる友よ。食物をんくへぐつ死動もされべつる
食を。桃柿。梨子蒲萄。酣瓜西瓜。蜜柑九年母を食よ。餓うる猿のごく。
唐茄子うま薯を最上の珍味とて。饅頭羊羹ぐりてぐ焼大ぐりぐ
の顙。ぐて甘ものを嗜うる。酒と煙艸をのむ。稀ふ年中よ只一度。正月の朳ろ
肉よ。麻上下をりけく。大きる名をうる。ちとあろめしけまど。
ぬりふ上下ぐるまぐる心履まぐり。二月初午の稲荷祭み。さくのつゐる猫
のごく。飲工ふく食ふ工ふ。二月も三日も
力をひけ。憘杭よぶくさぐり。憘羊よ
冷さ。十二月八日の吹草祭よ。一番をふ
誡をろごと。り盟よふると。大誓文ぐる。釈の頴よ私三本と唱へ
打いるとのれべちんちんぐごのれ宝と唱る呪あり。三束ふく髪を

みて袴を着女子は七歳より紐を解き騎奢のはじめとして祭の練物よそ生
産の面目とそのうるはしきを驚よろこべば夢想兵衛は再び悟て
そのど小膝を磕と打て子を艱て教ざるは父の過なり訓導くその嚴
師の情なる。父教師嚴きと両ながら外なけれども学問の成らざるは子の罪
なり。と司馬溫公がいひしもことわりぞかし夫又子は一體分身なり父これを教そのこ
子よく〳〵これを学ばざるは名を揚家をも興すべし。又教ても。その子学ざるは。
牙を愛せざるなり。子よ志ありとならば。その父兄よ教ざるは子を棄るなり。
不幸つづきて甚しくとも。この不教嶋の形勢を見よ。飽まで食へせ。暖かに
衣せ。一挙一動を教よ。親を嚴ど。賞罰正しくする友よ。その志を悖り
いふくの人その子を遠ざるとは。勢ひ形迹ざれば。これを責ると甚しけれど
終よ愛を失ふことなかれ。必ず師をえらめ。これが師の恩は父母の
亞なり。されて揮児よ物をゆるせ。その教なり。金と定むる今の数百字を覚ひろく。五節供銭の二百文を過るの謝義と
とそうの文字の相場。およそ一字を千
ほど。よく賣買よく買よ。文字
三年よりて。假名半年の二三本もあぐべし。それ物の用よろこと
之人のまよ。ふくのよういぬりのおと。師道よりて年季奉公
と称がつて家よ帰んでおやあらば。年中二度の宿りを待ねて使よ
出すことのうくへ。親里へ立ろ。檀那どの迎ひよ。桃丁りてもくといつてお親
里へ立れば。西親ろくと吃をあらして嬉ぐり。まず暮る夫間がおろふ。飯
かけ。好み唐茄子煮てまよそふ。食物がろんやう内よみてこえよう。痩せ
ど。と屓苦労がさてある。油揚と黄楊の櫛をそろく。髪のおさまを梳

梅てやまが。さつぢん好之助意かなう。朋輩がいぢめるの。伴助が毎日天窓を
ぐわんがうの内義が大根の皮をむくせるの。檀那どのが水を汲よふいふやうの。
水を汲くとそれが井戸端でとう。膝改を掲ろうさを。痛ろうといふぞ。扱
よふぞと呵ろくがごうや。御もつともの。このごろは三度の食が細うなつて。
あつもせぬをあるやうか。なんぼそなたのよまの云ふ。注が屓若旦も。堪へ
う私て注ぬ。ちやさんは頭痛めちよ。毎日天窓を敲きて。銅仁王の
でもお伽えぶある。ぞ十一や十二の小腕よ。水を汲せる檀那どのも檀那どの。自分
の子の可愛んを。ちつとやそつとせつかんでも。寒い時あの手
が落さうぢやさうな。店のやうさせもせど。
電やくさるか。約束か外住る。掴ろの痛むのぢや。白龍香つけて。
その膝改ちやく。ぬと。陽屋の二階で居相撲ろこと。
まち。棒ねこよ。ぐく針箱の引出し捜して
小ぜんのうちに。今までもよく辛防こと。
辛しやまと。住ろそれと親父もぞうやう。
まち。買食ひをするとまでも。年をそろ
こまそく。ろそろさ処が。世間がお見べ
買出しのお土がおしてある。そちが責ろ
こちくいさろぬ。買ろの処買ろのよ。
小銭をうひもおえ。年もいかせく。
ろくがとれもおえど。後もの恥の手
雛言歌のやひをろのとこの不教嶋よ
年季二三年も勤てる業がろとそや。

五十三驛を股よりけ。明ても暮てもとうりのるく。乞食と三日もとれば忘られぬといふ諺よりもれど。これうき勤がいやまさり。のうらくうきのふみるもあまど。神の導給ふとく。その度へ覚さられても。残る七年を勤果るか楫をり。跡る馬も。是より隙があれば。そ。人をも跡るうれ。上手が学ぶまじ。あらくくよだくし。そちらくよだし」些も足をとめさせねかる。跡をとるべ。ころの駒もかのぐく。打かうう續書尊筆。文学武藝。身の内ぐくまつけて。手のそぐくとうけ毎日うくく。これを習せ。ひとまあると云い腰元へ〳〵つけて。茶を汲せ立ずり。を教事ど。朝うう晩やで。ころの駒よ隙がるいかる。道へ〳〵端やよりかねものぐし。されどとく庭子うんどろ。とかくも主る人。その使ひ易れを便利と。僅る給銀そして。稚幼と云とうひ。昼夜暇がるのかる。終よ物習ふうがるど。習せそぐよ拵び

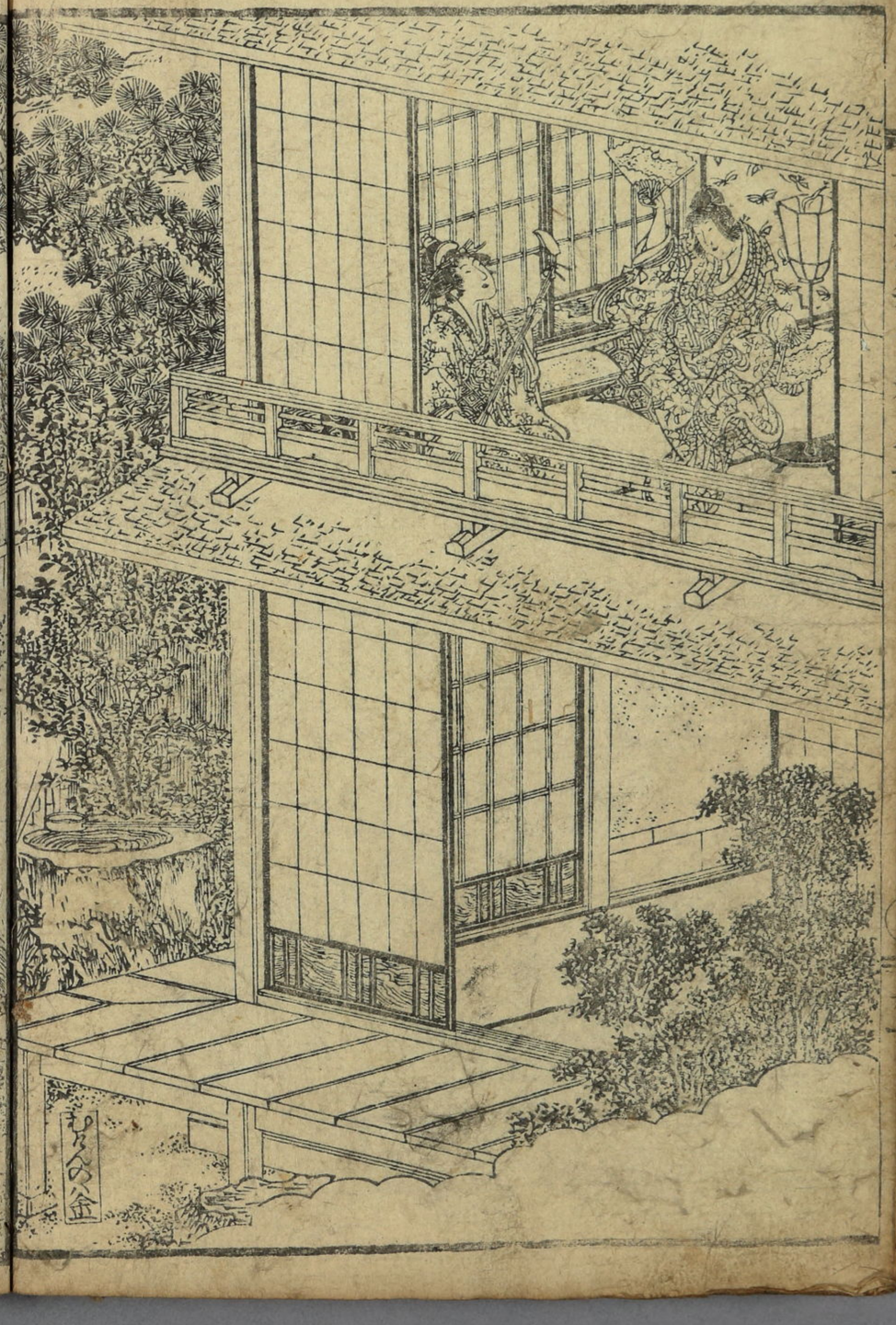
ふぐるが。稚さうめくうひあれば。奉公を真よりけく。親のいとをよくも業ど。天晴名筆文盲よそそあげるまても。庭子ど云とく人もあり。肩で風ふさるるめく。ふさるの時い役よ立ずり。稚幼ても甚うさは」主人も今いうとまぐり。稚幼と云うう扶持くても。さそく役よ立ねやうぐ。と罵るか大さ理るり。物習ふころよ習わせどくそ。役よ立ねもりつとも至極。ころを痛るめ紙窠ど習ひおぼえ主の益よふとみとおぼけるを。苦学よりいふれど。主も庭子も孔夫子の是ど。そ是ど。あの至うが」と。夢想兵衛いよろづ万よろひあろう。又女子の風俗よころをそめて直下せど。うんが不教の土地うでも。男子ねどよろうあれねど。三度の飯も。母親よ給事させく食ひ。朝夕の卧簟も。母親よあけおろさせ。髪も母親よ結せ。襞も母親よさせく穿。縦の袴を横ふる

ぞ。食ぞのことて。衣服櫛笄よ金銀を賞さ。物ぬよそぐへ雅俗
截縫も。ふりとみけまど。恥しいとも思ハど。手習よゆくを恩よりけく草
ハ濡さまよ投出て。母親よ乾さを。三絃ひくを。第一の藝ゆく。鄰の病人よ
遠慮せど。これく終よ淳気よるう。三絃の駒と共よ。そうの狗が狂ひ
あり。死道ことく」まつ。淳名を人よう。又ふむすあよあやをそくをる。織物よ巧
て。ぞせくそのおのそまんあるう。又貝あハせ歌骨牌。ぞりて目つけ絵るどいふ狂びをさそるも。眼
るんあるう。又貝あハせ歌骨牌。ぞりて目つけ絵るどいふ狂びをさそるも。眼
力をよくまんあるれど。その嶋あそハ古風ありとく。こまくこの狂びをせど。羽子
をつ死めく」鬼ごうるど。ぞべて気ざさる狂びをめく」。男子を男子嗅
ひともうど。髪の結ゆ。衣服の摸様。流行をまねて。きづく擇さど。
で三絃習ハが。そくくでも賀ひあちく舞踊を習ハば。そくくでもるうひ。

をべて人まねをのことるもあよ。常よ鄰の財をうぐくて。煩悩の絶る隙
月ハ節供まくく人形を客あらひくて。三
貴せど。これい天児の餘波ふく。男子
をまうど。女子の世帯そでめあく。薪炊のあ乃をそるうハとる乃くと
いふそ。ものともよ吟ぬまど。騎を者さ倹を守りてそ。のちくの為ぬもう
め学用の物よ倚羅を銜ひて三四日の眼をこの年て。葛籠の中へ秘め
おくハ何の乃よもるうがさかんふびようとも紙雛よ櫻の枝ハそえて
おんこそ。世ともそけどーそ。んどところあ
るうとハくとも。一言もあるべうど。そべてその少年團あんがくいいく
同車張扱の太起揚を小法師。物を何の手もるく打て紙屑籠へ命こもるう。その費いべぐぞ。

又築山泉水のごとく。四方僅に二三尺よりそ。烏賊の甲ハ化して
なり。石亀つくゝあげらるゝ。泡げともそみうひるく。金魚を盥より放され小
鳥ハ窻より啼。松虫鈴虫さうくゝと。時より隨て養ふ工ろく。井戸ハ釣瓶
を伏せく側とし。田地ハ一土器を一反と定めく。農夫鍬を肩にし
て。そこども畔さゞ。弘の天神を祭り。傳ハ歌を早く覚え飴賣より則傳
あり。屋基店より借あり。かゝる費を半者て。ものよくまなびうんあり。十人
の師をそふとも。二季の東脩ハ自在ふんと。夢想兵衛おうへまよ
まるやうる。小言ハ隙より糸ハもるくとも伸て。亦鄰の嶋を直りせがこの地の
男女の年よりまでく。いづれもくまでくも小ざうしく。鳴吟ぎゝくも小ざうし。
丈發句とまよまよう。されバ不教為師ハ
遠慮もるく會釋もるく。さ一出口を利ふり。理屈より仰る不理屈ハ

て。両親等者をやうこめなり。ものが損利根を臭よりけく。物を習ふても
まゝでさげとハいふまい。等ふるよりやく僕が求く。横ぐらえをよとそり。
あるとき件の小ざうんとちがようあて。一人がいふ。毎日てくしのよ
日暮ハ。日中が甚遠く。入り日のはが近とハいふよ。傍の人。その友を同ぐ。
されが日中ハ日暮ちひさくこえ入り日ハれが甚大きく。それをかて
揃るとれハ。遠いちくをもとくと。ふうう角よ答ふまじ。又一人ふうこ
出そ。いやくそれハ僻言るう。日暮出没ハ甚遠く日中ハ却
近し。左いふとるれハ。朝夕ハ日の影ぬく。日中ハ酷熱し。それをかて
揃るとれハ。日中が近いといのいづれも一理屈あるとうれバ是非の判
断さるものく。この論終ハ果さ。年久しくるとハふ。それを益
の論るう。よ〻日のめぐる如日中が近くとも。朝夕がちくとも。日ろ



ゆうよのくとるゝよぬ人間が。下界ゝゝ推量して。ゐが眼力のおよぶ
さけをいくがゐる理屈ハいひぐらるゝ。そぐゝ人とあらそふで叫ハ
ねとハ。一外無命の地を。ゐるゝ横領せゝう時教ゐよおぐえる。
不忠不孝。不義の名を負せられて。ゐの外ゝ世界の
雑。我意をそんとするゆゑよ。戯言も実ゐよりあり。それ彼よぶひよ
あるゝゐうく。長く怨を締ぶよ至る。かるゐへ少年國よ限ゝぐ
外ゝの嶋ゝもあるべし。それてゐの地の人物ハ堪忍といよとをゝねゑ
物よゝゝく情がるゝく。親むとありくへが疎くるゝ。何の怨もなゐのく。
天窓をちよんとそんゝ逃。曲路よ理伏ーく。ゐうとハいて人を驚
う。ゐけるゝく礫をうちゐる物ぞよこまをまねて。賤い面ハ小
器用よそれど。孟母のけまが店ぐえるゐのもあゝぐ。かる國ゐも。

蓬よまぐる麻のぞく。才發の支嶋よ。孝行ゐ島とハ痩地あり。竈
僅よ四五折よこぞれども。ゐの島の男女ハ両親ゐ者を労ーく。
牙の為をゐハぐ或ハ雪の中よ筆を堀く。こまをまねゝせ。或ハ氷の
上よ鯉を獲て。こまをまねゝせ。両親ゐ者よ廉畧よるゝとゝろぐ
子を生うづめふせんとゝく。黄金を堀出ゐうゐのもあり。ゐべてゐの
嶋の人氣柔和みて。両ゐ者の言葉よ違ハぐ。ゐ者病ゐ時
ハ。昼夜由断ゐく看病し。或ハ今昔四表八表の物ぐうして徒然
を慰めゐの如ゐまねゐせんとゝぐ。こまを勉めくゐのぐくるあい
あゝべゐるゐる実情よ生く。誠の至まる而ゐり。かる方よ天道ゐまを
憐ゐ。こまを恵ゐく。ゐひうみざる洪福をゐるとハ。ゐゐの島よ限ゐ。
蓋想兵衛ハこまてゐの好景をヨゝく。坐よ感涙を拭ひあぐど寝よ孝

と不孝は天性なり。烏の反哺も羊の跪く乳を吸ふも。雁の老おの列を乱さぬも。誰教るよあらざるよおのづからかくの如しその例をもつて推とも。鴉は反哺を乞ふ子をもつて。羊はよく苦労をする。長かの列をもつて。世よ孝行なる子をもつて。老楽よ終をするか。善種を蒔く報不孝なる悪種を蒔く報の悪報豆を蒔く豆が生栗を蒔く栗が生善を積む善人な子孫が生ずる。悪を積む悪人な子孫が生ずる。已より生ずる已よ返るものなり。子をもつて。親をもつて。国王の不徳その家のおさまらぬも。主人の不徳その子の教が乱るも。親の不徳その身の容られざるは已が不徳なれば人を恨むも愚癡の至り。子よ孝を教ぞまづその不孝を責るものぞ。耕さざれば。転ぶそ。稼ぬそ。稲が登らぬぞ。

田地を置るやうなり。子をもつけるぞと。気のつまるやうなのは。朝もはやく起夜もおそく寝。暑中も肌ぬぐ。寒の日も炬燵へ入。へこたるやうな衣食よりよき家をも。礼節もあの手をつくしてもの。ものいふのとこそへ。朝夕の機嫌伺のやうなのは。腹のそこよりの。紙口さがなく叱りつけ。我儘のやうなのは。呼べばすぐにも叱りも。ねむたがるも叱りも。右へ行左へ行道理非を明めず。快断を速めず。賞罰を正くせねば。家内のものは。ひれ伏せるぞと。ふんぞりかへるぞ。嘘言つくぞと。狸ぞと。外よ。狐よそと。鼻つまみをするやうなのは。稀なれば。叱りもせぬぞ。もの。されば下賤のものゝ家をおさむるは。こゝろ苦しきものなく。明くれ暮ても。五更六更の席薦のうへより起りそ。二神

ぜくりの釜の飯。五人もく〳〵の鍋の汁。香の物よ菜箸を手ひど。夜食
とり腊を厭ど。草箒ハ束ねく。屋根うら〳〵そこ。草難ハくけこ
干で乾し。ぐり腹の摠雪隠ハ先のくこのおくりをまちうねのぐる
子の二階下ハ。羊埒の店賃をふこげ。二人もく〳〵せが。二人もく〳〵の夜具あり。
五人の客人。二人ハ腰をくけ。こらで仁義礼智信を約くといふハ。九尺店で。
鎗をつくといふやうなとなれど。さハおもふど。ぬんや駄を
敬ふがよいとく。白屋よ住で廊上下ハ。ぐづめよるが。礼義ハもあるど。よう〳〵
駄子廉こうんでそうこ。そそも。駄の気よさうるど。一ッ皿の芋をそそをのく
食ふても歯のぬん駄ぬん。るとそうとも人が考ふ。衣食が足りでも。
金銭がうんても。妻子よ侮まれぬやうよ身をりてが考も義も教ら
聖人ハ教をやそど。生まぐりよ釣りのなまが鳥よ及ハの考。雁よ辞譲の

公ありやうなものく。大くその例ふハ〳〵ど。巣とくべきものるねど。それぐよ教
猿の藝づくしハめづくど。昔周の成王のく兒。貝母國とふ遠き夷が。舜
噛る雀をまめうせるもあり。唐の玄宗の時舞噛る馬がありとふ。舎
獣でも教ゆまバ教くよ可愛ハ子を捨育よもそこと。こそが所謂不教嶋の
習俗。それバ教いぞもよくくるる子ハよくるざれバ。それ舜ハ聖人なれど。舜の
父の瞽叟を悪人又乾の子の丹朱ハ河房るど。そをりくバ。教ゆハようねとハ。
それやこ眞の先の量簡るり。瞽叟が舜を憎んぐ。後妻よ逐ふやうまでハ。
の墓の表ばるぐ悪もせど。もぐん駄とりこも名。舜の孝行もあらハれ
うるぐぐ。縦親が邪慳おくとく。こもも又駄よ。よくまぐおくのるるりく。
又丹朱ハ悪るりとハど。乾のきりけがようけまバこそ。親父が天下を舜ゐ

譲るを。義しのともがらぞ。聊も猜むこころのあることなくの人こそおのづから。碁をうつの勝んとうそぶき却て負。負じとてが勝理をも。考究尽さんとやくばらそ。企及しがたくもあるを。不孝なるぢと云けん。是則考ふるの。さうぐやくと夢想兵衛かまとよ問。これよ答ひうるぐをうる。忽地風が吹くうて。紙鳶ハ南のうえまろりぬ。

○摠評

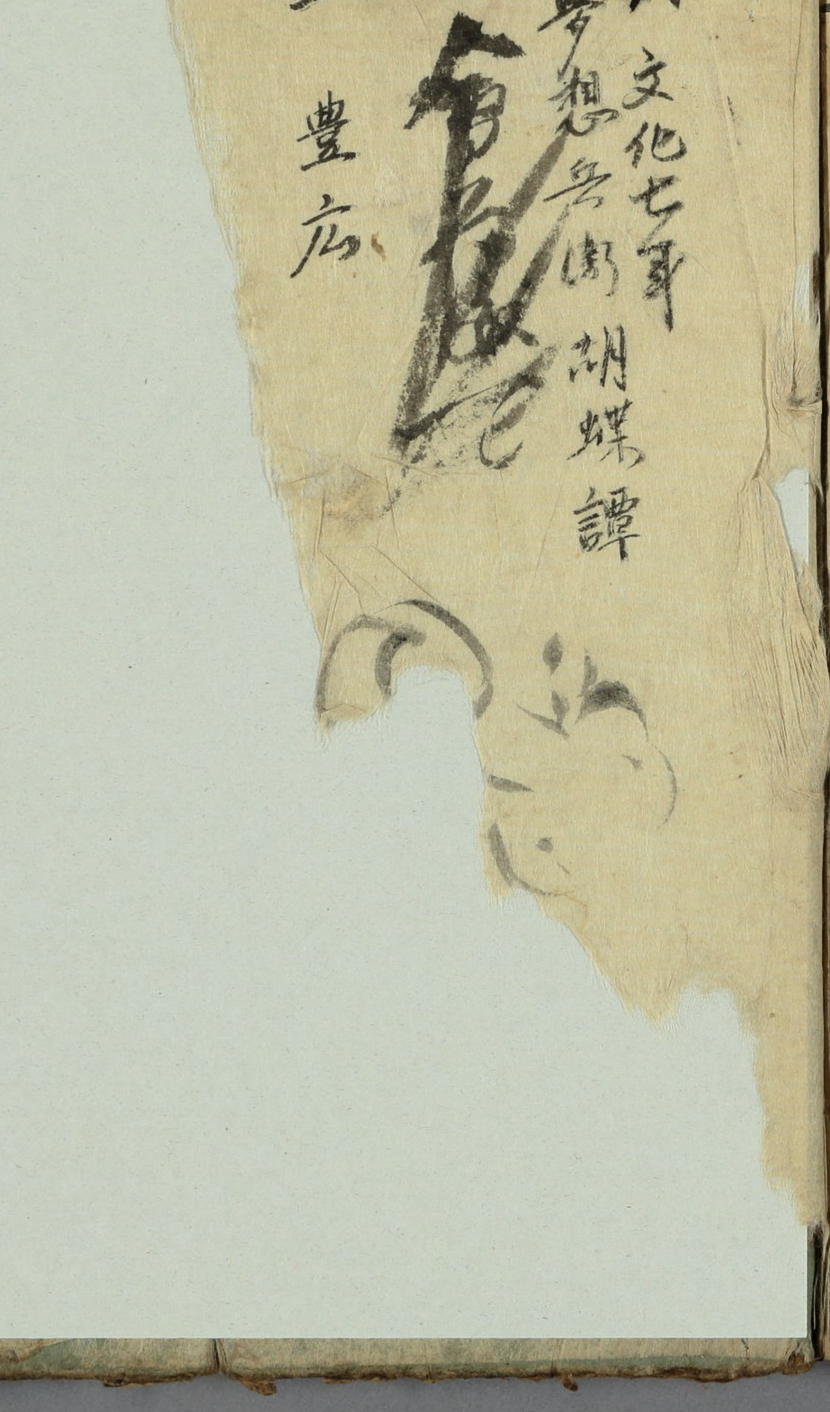
人の性よ善あり。悪あり。樹よ香木悪木あるが如。樹の善悪ハ風土よる。かるに友よ江南の橘も江北よ栽るとかれハ枳とるるがごとし。人の善悪ハ習よる。かれ史魚よ。伯嚭が風を学ぶものぞ頑夫も。廉よ。懦夫も志をるるとあり。彼性善性悪の論よ至て。おのく縁ところあり。譬バ二三才の小児過て井よ落んとするかこれをとる。

の親疎を問ど。慌忙て扶あげざるかるごとくその性の善ある不。不意ありてあるりのごとし。人幼稚さとえよ。食をとるまゝバ。歩てとるまどをとも。人の性悪ふるごと。成長の後よ情慾の競く不。その性悪るるごと。情慾の競く不。ゆえ。慾を割て。思しいものも。ぶりえ紙をさど。食こんりのもぶひともあひ口をてそ。そぐうう励で善をるとえ。人の性ハ悪るれども。教れバ善よるる。というんもその理あり。それがよや。即一性とるるというり。幼稚ハ。糸のぶく。青きよ染まバ青く。赤きよ染まバ赤し。揚子の岐道よ泣よ。迷んとをおそれてなり。善道へハとをも雖く。悪道へハ入り易し。その易れよ熟ぶて。難とをわえりのも。稚うの習ひよあり。道を首とし。親を慕へを善とし。

初刻　文化七年

夢想兵衛胡蝶譚

画工　豊広



雅兄の親を慕ふべく。成長ても父母を慕ふべく。況や不孝不義の至るべき。親の膝の上へ糞尿をたれなどするべくもあらざるを。その情慾を恣にして。終に愛を父母より失ひ。天地よりその身を容れざるに道を慕ざるものどてこれをありのざれ。